

太陽
シリーズ

太陽正倉院シリーズⅣ

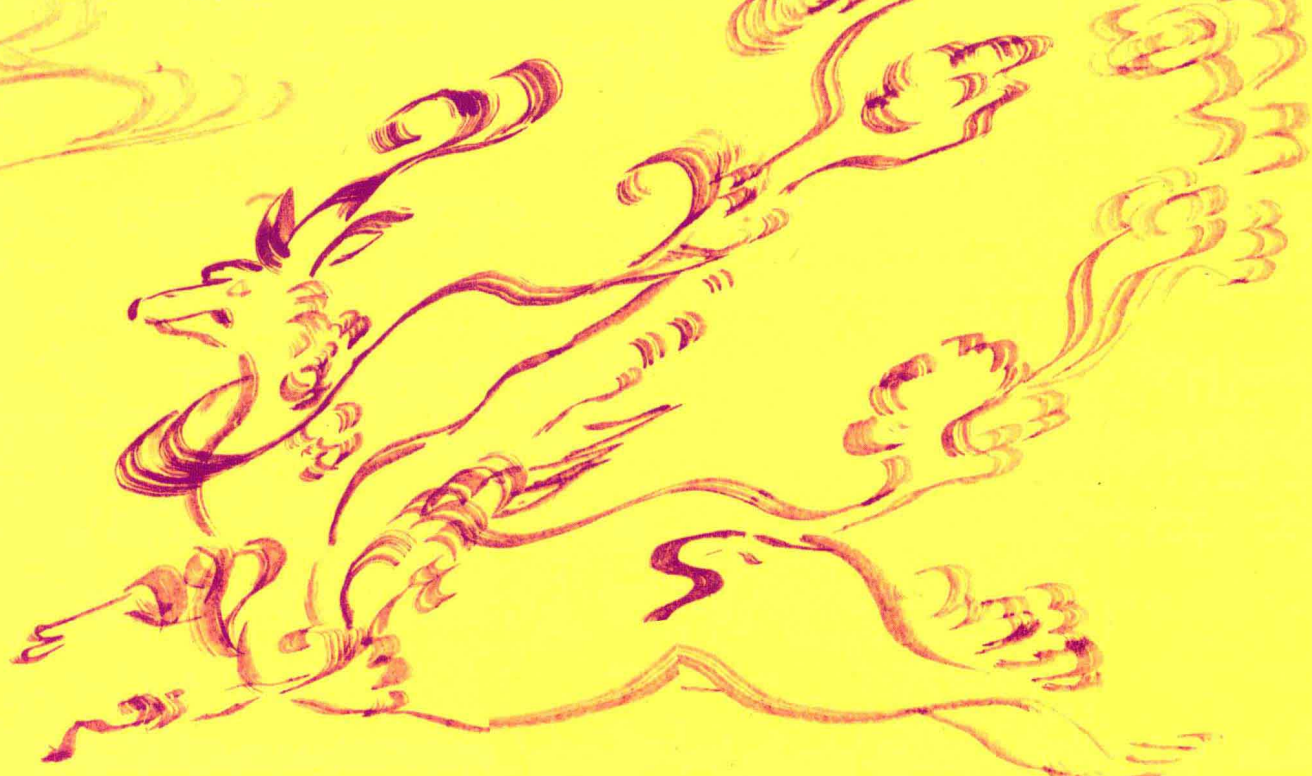
●監修 関根真隆

正倉院と天平人の創意





正倉院と天平人の創意



●カラー

天平に舞う

杉本健吉・画 4

正倉院御物私見

円地文子 6

律令国家を支えて

8

みほとけの前に

13

異国の工芸への憧憬

21

緑濃き山々に

25

古代の彩り

33

天平の都・平城宮

71

美を描いて

76

匠の世界

95

琵琶の旅

竹西寛子 98

暈縹彩色 山崎昭二郎の世界

110

●本文

正倉院と天平人の創意

関根真隆 51

古代の彩り

永嶋正春 62

天平の都・平城宮

佐藤興治 67

美を描いて

有賀祥隆 125

匠の世界

木内武男 132

対談 華麗なる古代の文様と彩色

山崎昭二郎 関根真隆 119

作品解説

木内武男／永嶋正春／関根真隆／有賀祥隆 137

表紙・扉掲載作品解説／編集室

146

●表紙＝鳳凰葛形裁文 正倉院宝物

●写真＝入江泰吉・宮内庁侍従職・宮内庁正倉院事務所・東京国立博物館・京都国立

博物館・奈良国立文化財研究所・東京芸術大学・中国／文物出版社・便利堂

●装画＝藤田道世 ●編集スタッフ＝佐藤信二／清水壽明 ●レイアウト＝スタジオ・ギブ

●掲載品所蔵者・編集協力

筑前国嶋郡川辺里戸籍	正倉院宝物	筆綱夾纏羅	正倉院宝物
相模国司解	正倉院宝物	雜玉幡	正倉院宝物
隠岐国郡稻帳	正倉院宝物	花氈	正倉院宝物
赤繩	正倉院宝物	粉地彩繪箱	正倉院宝物
黃繩	正倉院宝物	七曜四菱文筆綱錦	正倉院宝物
唐花文黄綾	正倉院宝物	繪紙の軸端	正倉院宝物
彩繪菩薩像幡	正倉院宝物	敦煌莫高窟第三三四窟壁画	中国
花葉文刺繡	正倉院宝物	仕女絹画	中国
蝶花卉文刺繡	正倉院宝物	加彩天王木俑	中国
金銅幡・第一号	正倉院宝物	執金剛神像	東大寺藏
金銅幡・第三号	正倉院宝物	貨幣	奈良国立文化財研究所藏
羅道場幡	正倉院宝物	陶片群	奈良国立文化財研究所藏
錦道場幡	正倉院宝物	陶枕三彩陶片	奈良国立文化財研究所藏
鳳凰萬形裁文	正倉院宝物	二彩壺復原	奈良国立文化財研究所藏
粉地彩繪几	正倉院宝物	軒瓦	奈良国立文化財研究所藏
銀盤	正倉院宝物	木簡	奈良国立文化財研究所藏
粉地彩繪長方几	正倉院宝物	文房具	奈良国立文化財研究所藏
黒柿蘇芳染金繪長花形几	正倉院宝物	鳥毛立女屏風・第四扇	正倉院宝物
蘇芳地金銀繪花形几	正倉院宝物	旧淨瑠璃寺吉祥天厨子屏繪	東京芸術大学藏
磁皿・二彩大皿	正倉院宝物	侍女図・李重潤墓壁画	中国
磁皿・二彩平鉢	正倉院宝物	胡服美人図	個人藏
磁鉢・三彩鉢	正倉院宝物	男子群像・李重潤墓壁画	中国
三彩壺	正倉院宝物	布作面	正倉院宝物
戎塩壺・須恵器壺	京都国立博物館藏	樹下開基図・阮咸捏撥繪	正倉院宝物
緑地霞灘花鳥文陶罐絶	正倉院宝物	山岳図・黒柿蘇芳染金銀山水繪箱	正倉院宝物
百索縷軸	正倉院宝物	沈香木画水精莊箱	正倉院宝物
粉地彩繪八角几	正倉院宝物	水中竜図・密陀繪盆	正倉院宝物
漆金薄繪盤・香印座	正倉院宝物	越前国足羽郡道守村地図	正倉院宝物
		墨絵山水図	正倉院宝物
		雲泥図・赤漆櫃	正倉院宝物
			密陀彩繪箱
			魚形を持つ男・李賢墓壁画
			小尺
			珊瑚魚形
			雲中麒麟図
			木画紫檀琵琶
			朽木菱形木画箱
			檀榔木画箱
			金薄押新羅琴
			螺鈿紫檀琵琶
			黒柿面厨子
			桑木木画某局
			沈香木画箱
			八角櫃匣
			刻彫梧桐金銀繪花形合子
			蘇芳地金銀繪箱
			珊瑚螺鈿八角箱
			紅牙撥鏝尺
			木画手箱
			百万小塔
			珊瑚貼経台
			山崎昭二郎復原作品
			宮内庁正倉院事務所・宮内庁侍從職・文化庁・東京国立博物館・京都国立博物館・東京芸術大学・奈良国立文化財研究所・東大寺・中国文物出版社
			入江泰吉・橘照嶺・上野アキ・小林知己・藤田東樹・高橋隆博・飯田裕康

THE SUN Series No. 28 Shōsōin Series IV

Shōsōin and originality of people in the Tenpyō era

The eighth century was the period for Japan to introduce overseas culture and to absorb it as well, from which Japan produced paintings and objects of craftwork of her own.

The theme of this volume consists of those paintings and objects of craftwork.

Laying the stress on the treasures housed in Shōsōin, works from China, Tōdaiji and others which are relevant to Shōsōin Treasures are also shown.

Pp. 4 ~ 5 Dancing man and woman with masks made of cloth.
Painted by Kenkichi Sugimoto.

Pp. 8 ~ 13

In the eighth century the capital was in Nara. Cloth was collected as tax from the provinces. Names and addresses recorded on cloth and tax register books.

Pp. 14 ~ 21

Articles which adorned the Buddhist images.

Pp. 28 ~ 34

Ceramics. Green is a dominant color which symbolizes Japan of those days covered with rich green.

Pp. 35 ~ 49

Designs and colors of various objects of craftwork. Characteristic is a shading off of design called "Ugen".

Pp. 71 ~ 75

Stationery, ceramics, coins, etc. dugged out from the ancient site of the palace in Nara.

Pp. 76 ~ 97

Paintings.

Pp. 100 ~ 109

Woodworks.

Pp. 110 ~ 117

Present restoration of designs drawn on architecture.
Drawing by Shojiro Yamazaki.

EDITOR: Shinji SATO

正倉院と天平人の創意

わが日本の国は、四周、海に囲まれ、山川、四季折々の変化に富んだ美しい国である。かつて七世紀なかば半島の動乱に際して、大勢の人々がこの安らかなる国へと移住し、彼らの学識と技術はその後の律令国家の成立に貢献し、やがてみほとけに祈る天平文化の花が開いた。

素朴かつ雄大ないわゆる「ますらおぶり」の歌をよんだわが古代貴族たちは、彩りにみちた異国の文物に限りない憧憬を示して、その華麗なる唐朝文化を全面的に受入れた。しかし天平びとの生活の場は、あくまでもわが緑濃き山々にかこまれ、かつ美しい清流の流れるところであつた。豪華絢爛たる大陸の文物は、その山川のなかで、古墳時代以来の流れとも融合し、やがて独自のものへと姿を変えつつ、わが風土のなかに埋没していった。



監修

関根真隆

文

円地文子・竹西寛子

装画

杉本健吉・藤田道世

写真

入江泰吉・宮内庁正倉院事務所

宮内庁侍従職・東京国立博物館

京都国立博物館

奈良国立文化財研究所

東京芸術大学

中国／文物出版社

便利堂・本誌写真部





正倉院御物

私見

円地文子

正倉院御物は皇室の宝物であると同時に、日本の世界に誇る至宝の集成である。千百年前の什器や織物が現在まで保存されたということ……而も、殆ど破損なく美事に原形を止めているということは、奇蹟といっているのではあるまいか。西洋や中国大陸の場合には、土地が乾いていて、建物も石や鉄が使われていたから、保存には比較的良好な条件を具えていたと思うが、日本の木造建築で、千年以上の間、火災を免れて来たというだけでも天佑と言わなければならない。

現に、治承四年、清盛が三男平重衡に命じて奈良の宗徒を攻めさせたとき、東大寺の大仏殿は、炎上して、大仏の御頭が落ちたことがあったが、その時にも正倉院は幸いに兵火を免れて、何一つ損じることはなかった。

現在は院の建物自身を、災害から守るために内にある宝物は皆、鉄筋コンクリートの別棟に納め、原の木造の建物に近づくには入口の戸を入る時、ベルの音がけたたましく鳴って、火災を防ぐ用意がされている。私はもう

十年ぐらい前であろうか、そのものしい音に驚かされて、ほんとうに「金閣炎上」や「法隆寺壁画焼失」のことを思うと、こういう心配はあつて然るべきだと思つた。

正倉院の御物は秋の一時、奈良の博物館にその一部が展示される。楽器であつたり、器物であつたり、染織類であつたり、種類はそれぞれであるが、ちょうどその時奈良に遊んでいると、拝見して楽しむことがある。

もう二十二年前になるであろうか、上野の国立博物館に正倉院のかなり、大規模な展覧会があつた。私もその折には行つて見たが、大変な人出で、何層にもなった見物の背後から、背の低い私などは、殆どかき見ることが出来なかった。いつか奈良へ行ったときには、勿論、真物の御物は見るよしもなかったが、事務室で、図鑑を見せていただき、夥しい宝の山に踏み入つたような豊かな気分につたことを覚えてゐる。



その時、事務の方のお話と併せて、面白かったのは、図版の中にある一つの器であった。それはたしか、玻璃器風の鉢のようなものだったとおぼえているが、記憶ははっきりしていない。多分中国の渡来品であったのだろう。大変繊細な模様が華麗な色彩で浮き出している何とも美しいものであった。係の人は、その図版のところを、手でおさえるように言った。

「これは一度だけ写真に撮って、ここにあるのですが、もう二度と光に当てると散々になってしまうので、今では永遠にお蔵の中に眠っているのです。そうして置くことが、このお宝を生かして置く唯一の道なのですね。」

この言葉と、写真版のあえかな美しさは、私を一瞬、夢幻の国へ誘って行った。存在するためには、人の眼からかくさねばならぬというこの器の運命がさまざまなことを暗示するのである。

この十月末から上野の博物館で正倉院の大規模な展示会が催される由であるが、間違っても、あの無いと言

えず、ざりとて有りとも言えない、幻の名器が姿を見せることはないであろう。

正倉院御物で、美しいと思うものは数々あるが、琵琶の軸に螺鈿の模様をちりばめたものは一きわ豪華典雅でいつでも思い浮べると眼の前にあるような気がする。

これも勿論、渡来品であろうが、軸が殆ど半円をなすほど丸く厚くて、あれを抱えて弾じる天平美人を想像すると、江戸期の顔も姿も細くしなやかにすぎて、大ききや逞しさのない跪い美しさではふさわしくない。美人の形容に、楊肥というのがあるが、この琵琶を抱いた天平美人は正にこの形容に当るお、お、かな人でなければならぬ。

私たちの内にしまわれている光明皇后や、橘三千代などという大女性は、勿論この型の美人だったに違いないと私は思う。

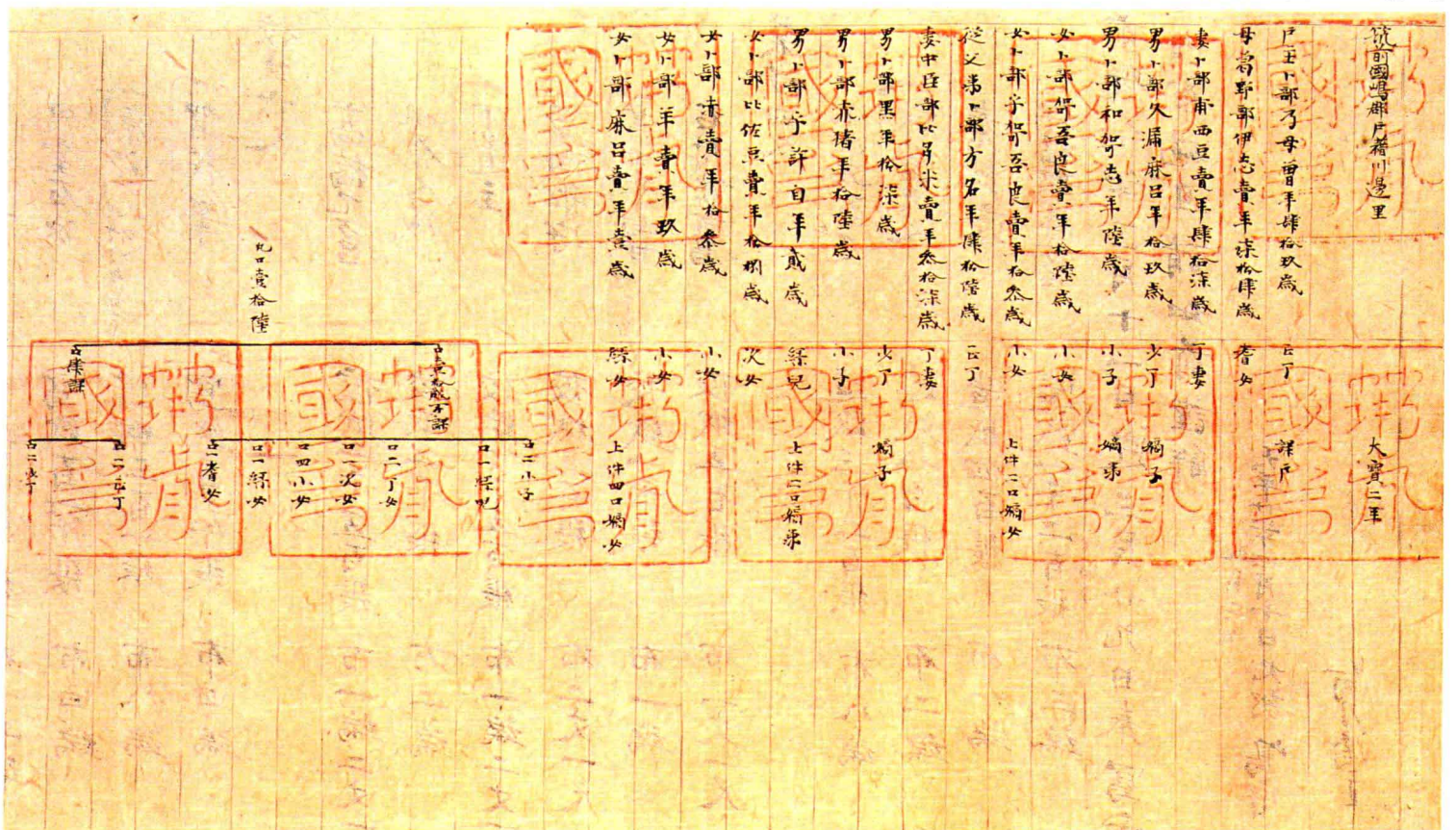


正倉院には諸国から運ばれて衣服や調度の類に姿をかえた麻布や^{あしや}絶が大量に伝わっている。そこに調庸銘と称して貢進した国郡里、人名などを墨書したものも残っている。それらは地方から農民たちの手で平城京に運びこまれ、

律令国家を支えて

律令国家を支える財源のひとつであった。また正倉院に伝わる文書のなかには、地方国衙から中央に提出した財政報告書、班田や税の台帳であった戸籍、計帳など多くの行政文書があり、律令政治の実際を物語っている。

筑前国嶋郡川辺里戸籍 正倉院宝物



相模國司解 申天至七年封戶祖事

合八郡會封壹拾叁壹仟叁佰戶田肆仟壹佰陸拾貳町貳段貳

伯玖玖不輸祖田壹仟貳佰肆拾肆町叁段壹佰陸拾

壹步見輸祖田貳仟玖佰壹拾陸町玖段肆拾捌步

祖肆萬叁仟柒佰陸拾捌束柒把

合給肆壹柒佰戶田貳仟壹佰捌拾貳町貳段壹佰壹拾柒步

不輸祖田陸佰貳拾町陸段壹佰捌拾玖步見輸祖田壹

仟伍佰陸拾壹町伍段貳佰捌拾捌步祖肆萬叁仟

肆佰貳拾叁束柒把

半給玖壹陸佰戶田壹仟玖佰捌拾町玖段壹貳步不

輸祖田陸佰貳叁町陸段叁佰叁拾貳步見輸祖

田壹仟叁佰伍拾陸町叁段壹佰貳拾步

祖肆萬叁佰肆拾伍束

納定一方一百廿二束五把
給主一方一百廿二束五把

合全給叁萬叁仟伍佰玖拾陸束貳把

皇右官會封壹佰戶田叁佰叁拾玖町肆段叁佰肆拾柒步不輸

祖田壹佰貳拾肆町伍段貳佰伍拾壹步見輸祖

田貳佰壹拾肆町玖段玖拾陸步祖叁仟貳佰貳拾叁

束玖把

皇下郡垂水鄉伍拾戶田壹佰柒拾貳町叁段貳佰肆拾步

不輸祖田肆拾肆町玖段貳拾肆步見輸祖田

相模國司解 正倉院宝物

相模國司解 正倉院宝物

田貳佰壹拾肆町玖段玖拾陸步祖叁仟貳佰貳拾叁

皇下郡垂水鄉伍拾戶田壹佰柒拾貳町叁段貳佰肆拾步

不輸祖田肆拾肆町玖段貳拾肆步見輸祖田

壹佰貳拾肆町玖段玖拾陸步祖叁仟貳佰貳拾叁

束玖把

餘陸郡中封鄉伍拾戶田壹佰陸拾柒町壹段壹佰柒

步不輸祖田柒拾玖町陸段壹佰貳拾柒步

見輸祖田捌拾柒町肆段貳佰肆拾步祖

壹仟叁佰拾貳束

品舍人親王會封叁佰戶田捌佰肆拾玖町貳段壹佰陸拾

步不輸祖田貳佰捌拾壹町陸段壹佰陸拾步

見輸祖田伍佰陸拾柒町伍段玖

拾陸壹祖捌仟伍佰壹拾貳束玖把

皇下郡垂水鄉伍拾戶田壹佰柒拾貳町叁段貳佰肆拾

拾玖束肆把

皇下郡萬里鄉伍拾戶田壹佰陸拾柒町壹段壹佰伍拾

玖步不輸祖田肆拾叁町壹段壹佰叁拾

玖步見輸祖田壹佰貳拾肆町玖段玖拾陸步祖叁仟貳佰貳拾叁

束玖把

餘陸郡壹佰伍拾戶田叁佰捌拾柒町玖段壹佰肆

倉叁間

穀倉一間
類倉一間

空倉一間

郡司

少願外從八位上勳土等海部首大伴
主帳外少務位上勳土等丹部保智萬侶

周吉都天平元年見定稻穀玖伯壹拾捌斛叁斗伍升玖合

類稻陸仟壹拾肆束捌把壹分此中雜用漆伯玖拾叁束

叁把伍分

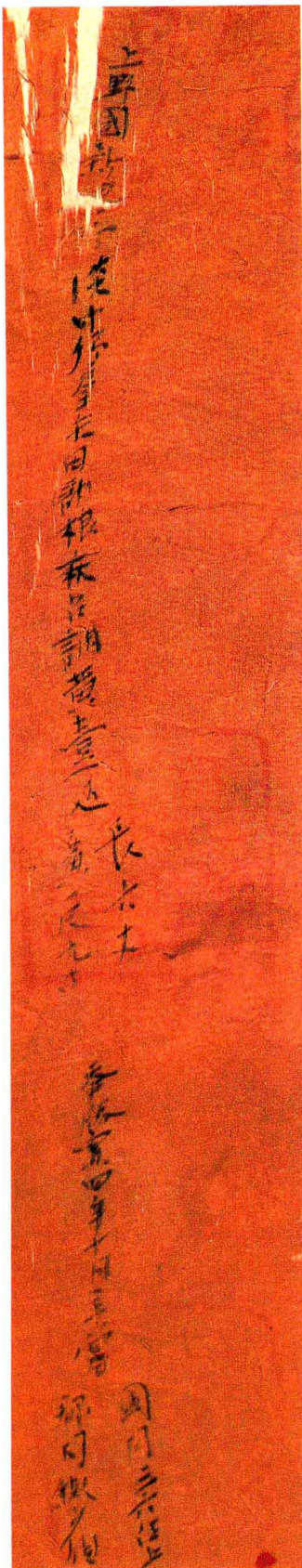
出舉壹仟伍佰叁拾束 利漆伯陸拾伍束 并貳

仟貳伯玖拾伍束

遺叁仟陸伯玖拾壹束肆把陸分

合定稻穀玖伯壹拾捌斛叁斗伍升玖合

類稻伍仟玖伯捌拾陸束肆把陸分



▶ 赤絶 正倉院宝物

◀ 黄絶 正倉院宝物





唐花文黄綾 正倉院宝物

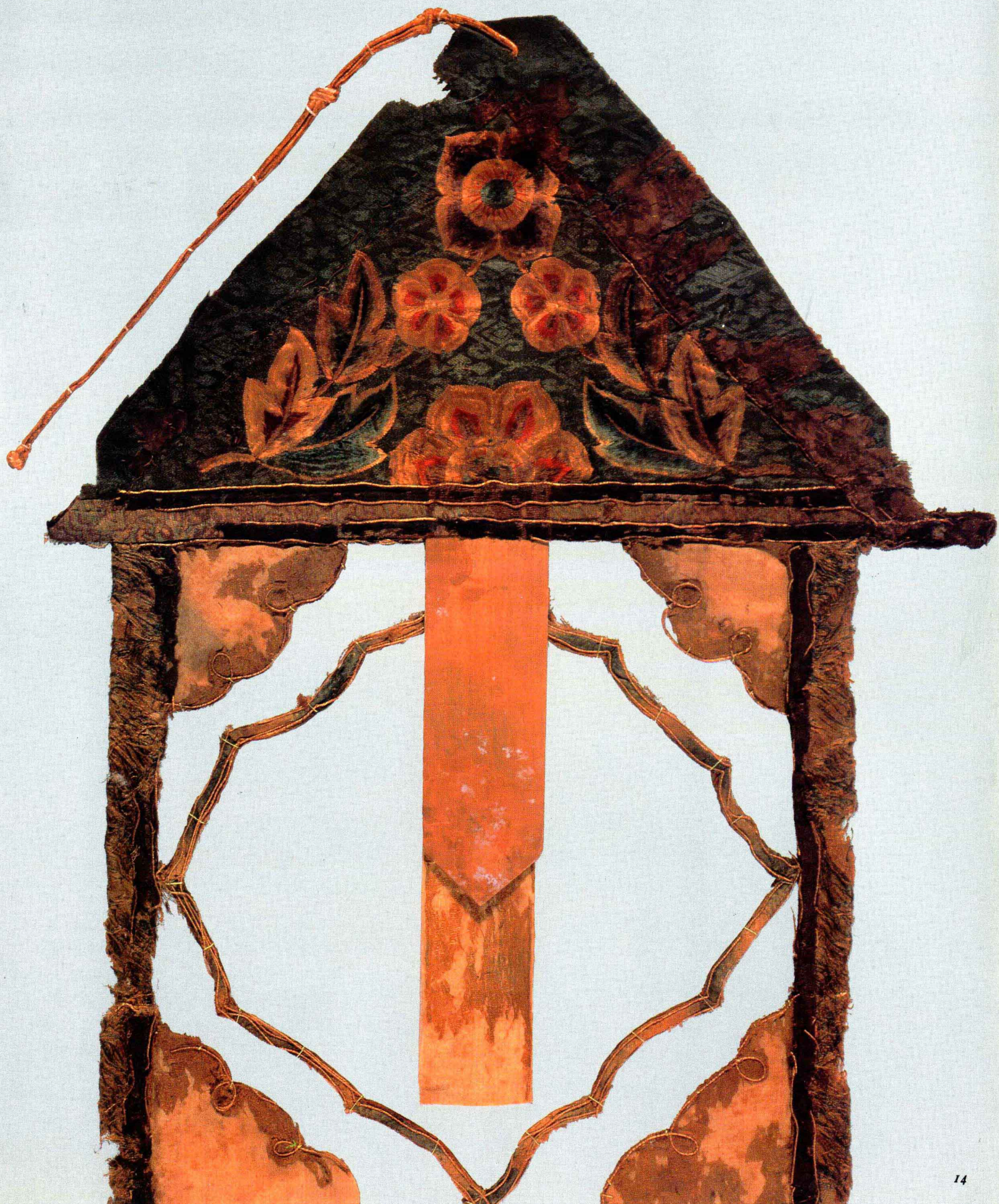
みほとけの前



彩絵菩薩像幡 正倉院宝物

正倉院には幡というものが数多く伝わっている。材質的には布幡・錦幡・羅幡・仏面幡・金銅幡などがある。天平の人びとはみほとけの前の莊嚴として、堂内外にわたり多くの幡をかかげたが、それらを製作し、供養すること

に無量の功德があると信じた。幡は頂を三角形につくりその下に枡形四個をつらねる。鳳凰形裁文は金銅板で作られ、透かし彫りし、両面から輪郭を線刻し、その間に鈴や玉を飾る。天平人がいかに美しく仏前を莊嚴したかを物語っている。







金銅幡 正倉院宝物